



2021 日本のうたごえ祭典 in ひろしま

企画ニュース⑨

発行 2021.10.17

祭典企画委員会

## 各企画の取り組み進む！

12/4 コンサートヒロシマ・I

今福優コーディネート和太鼓合同「生命の詩」吹奏楽団&合唱付き

### 壮大なスケールで歌いあげよう！



写真左より 高田さん・大野さん・今福さん・小川さん  
皆さんと親交のあった故新江義雄さんの写真を囲んで

10月8日、和太鼓合同のステージについて、今福優さん、指揮者小川秀樹さんの代理として和太鼓奏者の小川敬子さん、太鼓センターの大野正信さん、企画委員長の高田龍治さんが打ち合わせをされました。

今回は、残念なことに、コロナ感染防止対策としてステージに上がることができる人数が限られていることから、吹奏楽団は金管5重奏とすること、対面で和太鼓を打つことが難しいので、もみじ作業所の仲間の参加ができなくなったことが確認されました。

打ち合わせ後、今福さんから伺った合唱についてのお話をお伝えします。

コンサートヒロシマIの最初に演奏される「生命の詩」は太鼓、ブラス、合唱で演奏される壮大なスケールの楽曲です。10月11日付「うたごえ新聞」にひろしま太鼓センターの大野正信さんの記事が載っています。「生命の詩」が100人規模の合唱で演奏されるのは初めてのことです。

「生命の詩」は初め太鼓の楽曲で、2004年に「今福優 熊本10周年記念コンサート」で120台の太鼓で初演されました。合唱が付くようになったのは今福優さんの地元である島根県益田高校の合唱部から合唱と太鼓のコラボレーションが出来ないかと言われたことがきっかけで、今福さんが作詞されたものに曲がつけられて現在の形になりました。

「一度だけの人生、生命燃やし、歌をこぼそう」という印象的な歌詞は、歌を口ずさみながら明るく生きようという気持ちがあふれ出た言葉です。

生命の循環、生命の賛歌、輝いて生きようのメッセージを、太鼓・ブラス・合唱で大きなスケールの歌として、「コンサートヒロシマ・I」のオープニングを飾るにふさわしい曲として歌いあげましょう！

## 12/3 ピースウェーブコンサート 混声合唱組曲「こわしてはいけない」

### 曲に込められた“曲の生命”を胸に、歌おう！

10月10日、混声合唱組曲「こわしてはいけない」のレッスンを初めてリアルで行われました。2017年広島合唱団演奏会での本番指揮者三上和伸先生のご指導で、楽しい中にも深みのある充実したレッスンをしていただきました。(祭典合唱団ニュースNo.9に詳細)



作曲者池辺普一郎先生が、「うたごえ新聞」の連載エッセー「空を見てますか」の2017年8月14日号と8月21・28日合併号で、「作曲のからくり」と題してこの組曲について書いておられるので、第2曲「こわしてはいけない」と終曲「抱きしめよう」の部分だけ抜き出して紹介します。

「こわしてはいけない」は変ト長調。1曲目の長3度下の調だ。穏やかで柔らかな響き。こわしてはいけない懐かしいものの列挙に、この調がふさわしい。だがここは、最も肝心な「こわしてはいけない私たちの憲法」を歌う曲である。変ト長調であっても強いインパクトが必要。そこで考えた「ケンポウ」という語のアクセントは「ケ」。だがケを高くし、次に下がる音型にすると、歌う人のソの口形は必ずしも強く結ばれない。しかしケからソへ上がる音型にすると、その時のソは、唇を強く閉じる形になる。そのほうが、強い意志を表せるのではないか・・・。

詩を旋律化する際、言葉のアクセントに忠実にということによく言われるし、その通りと僕も思う。が、時にもっと大切なことがある。たとえば武満徹さんの名歌「死んだ男ののこしたものは」(谷川俊太郎詩)は「シンダ」「オトコ」「ノコシタ」「モノ」・・・ことごとくアクセントが不正確だ。だがそれゆえに、何か不貞腐れたような、あるいはヤケクソのような感じが出てきて、印象が強い。もしアクセント通りだったら、品行方正で健康的な、つまらない歌になっていただろう。

この2曲目のインパクトは強くなければ・・・。アクセントをあえて変えよう！僕は、そう考えたのだった。

<中略>

最後は「抱きしめよう」モトに戻って、変ロ長調だ。詩の構成に従った3番までのソングの形である。この曲は何といても、クライマックスの「両手でギュッとギュウウツと」の箇所をどんな響きにするかで腐心した。試行錯誤の末、「増3和音(オーギュメント)」を選んだ。指向力の非常に強い和音だ。歌う人の、そして聴く人の心をギュッと掴むだろう。それがこの曲の生命になるだろう。